

# Book Review



## インプラントオーバーデンチャーの 基本と臨床 磁性アタッチメントを中心に

田中譲治 著

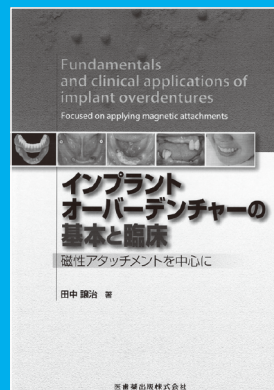


Reviewer

水谷 紘 Hiroshi Mizutani

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科  
部分床義歯補綴学分野前准教授)

A4判, 136頁  
定価 11,550円  
(本体 11,000円+税 5%)  
医歯薬出版刊



近年、インプラント関係の書物を数多く目にするが、インプラントオーバーデンチャー、こと、その術式まで言及したものとなると限られる。本書は磁性アタッチメントを用いたインプラントオーバーデンチャーの症例と術式、およびそれらの妥当性を裏づけるデータを収集、大成したもので、著者の田中譲治先生は大学卒業から3年後に地元千葉県柏市で自らの診療所を構え、以後20年以上にわたって臨床の最前線を歩み、地域医療に貢献してきた臨床歯科医である。

「インプラントを埋入して固定性でなく可撤性の補綴物」「インプラント体と天然歯の混在したオーバーデンチャー」「インプラントオーバーデンチャーの維持装置としての磁性アタッチメント」「従来の全部床義歯では代償として支払わなければならない歯槽骨吸収」等々の命題を掲げ、臨床例や論文、数値をあげながら解説を加えている。

高度に歯槽骨吸収をきたした顎堤や固定性義歯では極端に長くなる人工歯冠長、さらには手術侵襲度、費用など

の観点から、インプラント埋入後の補綴装置として可撤性有床義歯の適応症はたしかに存在する。これらの症例を的確に見極めることが前提ではあるが、インプラントを埋入すれば、無歯顎が少数歯残存に、すれ違い咬合が対合関係を有する症例に変わるわけで、数少ないインプラント埋入で得られる効果は大きい。当然といえば当然のことである。特に可撤性義歯に自信のある術者、およびその患者さんほど授かる恩恵は大きいのではないだろうか。

論文や統計学的数値など一昔前となると、日本語の文献でさえ大学などの図書館に行って実物またはそのコピーを入手しなければ読めなかったものが、今やSummaryはおろかFull textの入手が自宅で可能になった。著者も大いに活用したにちがいない。

文章や語句の用い方に若干検討の余地はあるが、それを補ってあまりある症例写真の美しさ、わかりやすさ、解説の丁寧さがあり、著者のインプラントオーバーデンチャーに対する、控え目ながら本気度が伝わってくる好著といえよう。

インプラントオーバーデンチャーに多少なりとも興味のある方にお勧めの一冊である。

本書刊行以前の昨年8月、たまたまインプラントオーバーデンチャー症例の見学を目的として、著者である田中先生の診療室を訪れる機会があった。いわゆる固定性のクラウン・ブリッジタイプの症例は何度か目にしたが、可撤性の有床タイプのインプラント症例は目にしたことがなく、McGill ConsensusやYork Consensusなど頭ではわかっているにもかかわらずコメントする立場にない現状を何とかしたいという考えのもとの見学であった。

無歯顎から、少数歯残存、すれ違い咬合に至るまで6症例、2時間余の見学ではあったが、いずれも経過良好でみごとな症例であった。カルテやX線写真を参考に、埋入後1.5年から12年経過した患者さんとの会話を通してわかったことは、患者満足度がすこぶる高いということであった。

このことを本書評の最後に付記しておきたい。